中原中也記念館
館報 2011

第16号

Public relations magazine 16

◎特別寄稿
美しい敗者
中島 義道

歩く寒い空の詩人
— 吟遊科学者がみた中原中也
長沼 毅

◎寄稿
金沢の中也のこと二三
松田 章一

◎常設テーマ展示
「これが私の故里だ」

◎特別企画展示
「河上徹太郎と中原中也 — その詩と真実」

◎企画展示ピックアップ
「中也の住んだ町 — 中野・高円寺」
「中也が読んだ本」

◎新収蔵資料紹介
『悲劇の哲学』
河上徹太郎「秋立つ日」草稿

◎記念館ニュース
コンサート「声のまぼろし」
詩の朗読会
湯田温泉X'mas湯らぎ狐サート

主なできごと（平成22年度 行事記録）
第16回中原中也賞受賞作品
平成23年度 行事予定

Chuya Nakahara Memorial Museum

特別寄稿 | Special contribution | 1

美しい敗者

text=Yoshimichi NAKAJIMA
中島 義道

いま、私の手許に三冊の古本がある。一冊は中原中也訳『ランボオ詩集』（野田書房）、もう一冊は小林秀雄訳ランボーの『地獄の季節』（白水社）、そして最後の一冊は『富永太郎詩集』（筑摩書房）である。十五年ほど前に印税がある程度入ったので、知り合いの古本屋からまとめて買ったものである。ランボーの中也訳も小林訳も残念ながら二刷りであるが、当時、中也や小林が出版元から送られて来たこの本を眺めたり摩ったりしながら喜んでいた情景が目に浮かんで来る。富永太郎の詩集には、小林、中原、それに河上徹太郎の献辞が付いていて、青山二郎の装丁、限定五百部で「324」の判子が押されている。

小林秀雄は高校生の頃から読んでいたが、本格的に読み漁ったのは、法学部に進むのを諦めて哲学を志した二十歳の頃から。当時の私は小学生以来の「死」に対する恐怖が絶頂を向かえ、それを考えると頭が痺れ、人生は果てしなく虚しく思われた。だから哲学を選んだわけだが、これでもう「まともな」人間にはなれないという転落感と共に不思議な安堵感もあった。そんな私にとって、小林の到底哲学的とは言えない断定的直観的口調には反発を覚えることの方が多かった。

中原中也にのめり込んだのは、それよりさらに遅くて、学部を二度留年してようやく哲学科の大学院に進み、もうじき二十五歳になる頃であった。中也の日記によると、彼は『ツァラトゥーストラ』『方法序説』『この人を見よ』それに西田幾多郎などを読んでいる。ベルクソンを賛美してもいる。だが、彼はほぼ完全に（小林以上に）哲学が解らなかった男であろう。私の方はと言えば、大学院に入学したとたん、薄暗い研究室で哲学を「研究」している仲間の学生たちに激しい嫌悪感を覚えた。こんなことをしたってやっぱり死んでしまうのだ！　ならば哲学を研究する意味などまったくない。だが、今さら「娑婆」にも戻れない、死が無性に怖いのだから死にたくもない、さて俺はどうすればいいのか？

こうして、自然に大学から足は遠のき、私は自分の部屋でベッドに括り付けられたように終日うつらうつらしていた。修士論文の期限は迫っていたが、ほとんど何も手をつけていない。どうしたらいいのか？　俺はこのまま何もしない、何もできない男として一生を終えるのか？　そんな頃ふっと中原中也詩集を捲ると、その単純極まりない呻き声が私に突き刺さって来た。

とにかく私は苦労して来た。
苦労して来たことであつた！

あゝ　それにしてもそれにしても
ゆめみるだけの　男にならうとはおもはなかつた！

あれはとほい処にあるのだけれど
おれは此処で待つてゐなくてはならない

時折、寝ていることに飽き果て、死のうという決意を僅かに抱いて家を抜け出し、腰越海岸から七里ガ浜に出ることがあった。防波堤に腰掛けて春の眩しい海岸を眺めていた。

お天気の日の、海の沖は
なんと、あんなに綺麗なんだ！
お天気の日の、海の沖は
まるで、金や、銀ではないか

沖の方では波が鳴らうと、
私はかまはずぼんやりしてゐた。
ぼんやりしてると頭も胸も
ポカポカポカポカ暖かだつた

ポカポカポカポカ暖かだつたよ

沖を眺めていると、目頭が熱くなって来るのであった。ああ、なんで生まれて来たのであろう？　そして、なんで死んで行くのであろう？　何もかも解らないではないか。俺は何も解らないままにこのまま死ぬのか。当時の私は、敗者になるしかないのなら、せめて「美しい敗者」に成りたかった。そんな夢に中也がぴったり一致したのかもしれない。とはいえ、私は自分が中也と似ていると思ったことは一度もない。むしろ、彼は私とは対極的な男ではなかったか。誤解されることを覚悟で言えば、私は彼の「健全さ」について行けなかった。絵に描いたような青春、絵に描いたような人生の悩み、そして、長谷川泰子をめぐる小林秀雄との絵に描いたような三角関係など、あまりにも普通すぎ、健康すぎる！　当時の私は、世界が存在すること、なかんずく自分が存在することの意味が解らず、家族をはじめ誰も愛することはなく、ひたすら死ぬことを恐れ、それを免れる唯一の方法は自殺だと確信していたのだから。それに比べると、中也はじつに旺盛に生きている！　これは、羨望と同時に軽蔑に値するのであった。

彼にとって、東京に出て来てからの人生の図柄は思いのほか単純であったのではないかと思われる。それは、いまや自分に残された唯一の出世の道である詩人として名をなすこと、それだけである。そして、死ぬことに怯えていた私にも、それだけは腹の底に響くほどよくわかった。

私の母方は下関の出で、長州人ならではの出世欲に燃えていた。母の祖母は、小学校の教科書を全部暗記していて、一人の男の子と五人の女の子に容赦のないスパルタ教育を施した。理解ができないと、持っていた物差しで幼い子たちをびしびしと叩くのである。その結果、六人すべてが小学校を主席で卒業した。その後、長男は山口高校（現在の山口大学）から京都大学の法学部に進んだが、若くして交通事故で死んだ。娘たちは、今度は夫や子どもの学歴を競い合うことになった。母は虚栄心が強く、私は生まれた時から漠然と東大、しかも法学部に行かなければならなかった（だから法学部を捨てて哲学に鞍替えしたことは完全な敗者なのである）。

こんな雰囲気の中に生れた私は、中原の家を流れていた空気がなんとなく解るのである。小学校の頃、中也は一番にならなければ家に入れないと叱られたという。地方の名望家であり、まして長男ではないか。出世しない法があろうか？　だから、中原の詩のいたるところに燃えるような出世欲が響いている。

角川書店版『中原中也全集』の編集に携わっていた大岡昇平が、中也の郷里を訪れてこのことにはじめて気づいたと語っているが、まったくもって鈍感というより他ない。

中也が小林などと付き合い始めた頃、彼は中学さえまともに出ていなかったのだから、親を喜ばせるだけのためだけでも立派な学歴を有したかったであろう。当時の彼は成城学園高等部の学生や帝大生と付き合っていたのであり、ほとんどすべてが東京生れであり、しかも小林や河上がまさに世に出るところを目撃しているのだか

美しい敗者

ら、コンプレックスはぐさぐさ彼の身体を刺し続けたことであろう。大岡は、その頃酒を飲むと誰彼を問わずからみ悪態をつく中也の思い出を語っている。

だが、中也は詩的言語能力において掛け値なしの天才であった。二十歳の頃の日記には、ニーチェのように、完成した言語表現が見られ、その思想も青臭いところは微塵もなく鋭くしっかりしたものである。しかし、彼は学校秀才ではなかった。どうにか外語の特修科を出たが、彼の周囲の小林、河上、富永、大岡など抜群の秀才たちの器用さをいまいましく思っていたことであろう。とはいえ、中原は、自分が小林や河上と並ぶ、いやそれ以上の才能を有しているという自負心があった。だから、自らの不運に激しく苛立ったとしても、本物の天才は才能を疑うことはないのだ。

彼は人間としてごく素直で単純な男ではなかったかと思う。ボードレールのような韜晦趣味からこれほど遠い詩人もいない。宮沢賢治の死後すぐにその全集が刊行されるにあたって、中也は嫉妬とも取れる戸惑いを書き記している。また、自分が成れなかった高校生や大学生に対しても剝き出しの反感を示すことを憚らない。中でも、大岡昇平が何度も書いているが、女を盗られジャーナリズムで成功の階段を上りつつある小林に対して、恨みは深いところに達していた。だが、これもニーチェのように、彼はぐずぐず蟠りながらも自分より強い者に屈してしまう弱い男なのだ。「優しい」と言い換えても、「女々しい」と言い換えてもいい。小林のような潔い男らしい生き方ができないのだが、これこそ中也の魅力である。

学歴において、器用さ（世渡り）において、劣勢を挽回することができなかったが、ようやく『山羊の歌』の成功後（二十七歳の頃）彼のもとに続々と原稿依頼が届いた。こうした急展開にそれほど戸惑いを見せないのも、天才だからであろう。その頃の文章は、すでに詩檀の大御所という風情である。

だが、神（がいるとしたら）は、中也をさらに痛めつけた。あたかも中也を「完全な詩人」にするためのように、神はようやく落ち着いて来た彼から二歳の長男、文也をさえ奪い取り、同時に彼のあらゆる希望さえ奪い取ったのだ！「愛するものが死んだ時には、／自殺しなけあなりません。」で始まる「春日狂想」は発狂直前のような凄味があるが、私にとってわけもなく哀しい作品は、文也の思い出を詠った次のものだ。

おもへば今年の五月には
おまへを抱いて動物園
象を見せても猫といひ
鳥を見せても猫だつた

ウィーン行きの飛行機の中で読み、涙が止まることがなかった。そして、中原中也の人生を一幅の絵画のように描いた作品。

思へば遠く来たもんだ
十二の冬のあの夕べ
港の空に鳴り響いた
汽笛の湯気は今いづこ

中原中也は、まことに「神に愛された子」であり、不思議なほどの不幸を生き抜いた。それは、彼にとって辛く苦しいことであった。しかし、小林が描くゴッホのように、中也はそれしかできない人間なのだ。小林はこうした人間を「描く」ことによって、自ら不幸に打ち砕かれるのを避けていたふうがある。小林のような人間は、中也のように純粋な不幸を生き抜くことができない。美しい敗者をこれほど完璧に演じ切ること、それは純粋な天才にしか許されないことなのだ。このことに、小林も感づいていたに違いない。そして、到底かなわないと思っていたに違いない。

中島 義道〈なかじま・よしみち〉

哲学者。昭和21年7月9日生。東京大学教養学部教養学科（科学史科学哲学分科）卒業、東京大学法学部卒業、東京大学大学院人文科学研究科修士課程（哲学専攻）修了、ウィーン大学哲学基礎綜合学部哲学科修了（哲学博士）。
元・電気通信大学教授。現在は東京で「哲学塾　カント」を主催している。
主な著書に『ウィーン愛憎』（中央公論社）、『カントの時間論』『カントの自我論』『「死」を哲学する』（岩波書店）、『ひとを＜嫌う＞ということ』（角川書店）、『哲学の教科書』『差別感情の哲学』『「純粋理性批判」を噛み砕く』（講談社）、『うるさい日本の私』『私の嫌いな10の言葉』（新潮文庫）、『哲学の道場』『時間論』（筑摩書房）、『孤独について』（文藝春秋）、『〈対話〉のない社会』『不幸論』（PHP研究所）、『後悔と自責の哲学』（河出書房新社）などがある。

特別寄稿 | Special contribution | 2

歩く寒い空の詩人
――吟遊科学者がみた中原中也

text=Takeshi NAGANUMA
長沼 毅

歩く詩人

僕の名刺の肩書きはたったひとこと「吟遊科学者」である。フランスの吟遊詩人アルチュール・ランボーを意識してのことである。ランボーは実によく歩く人だった。何回か家出したときも、パリ・コミューンに参加したときも、アルプスを越えてイタリアに行ったときも、徒歩だった。ここまで歩く詩人も珍しいだろう。そして、中原中也もそうだった。「早春散歩」というような題名だけでなく、中也の詩文にでてくる風景は、立ち止まって静観したというより、歩きながら眺めたというイメージがある。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちてゐた。
（中略）
月夜の晩に、拾つたボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

「月夜の浜辺」

月は空にメダルのやうに、
街角（まちかど）に建物はオルガンのやうに、
遊び疲れた男どち唄ひながらに帰つてゆく。
（中略）
ただもうラアラア唱つてゆくのだ。

「都会の夏の夜」

最後にラアラア唄っているのは、夜の街をあてもなく彷徨う中也自身だろう。この徘徊癖は、京都に出た十六歳の頃、すぐに現れた。そして、多くの出会いを生んだ。

その秋の暮、寒い夜に丸太町橋際の古本屋で
「ダダイスト新吉の詩」を読む。

「詩的履歴書」

中也は京都を歩き回ってダダを知り、長谷川泰子と富永太郎に出会い、ランボーに触れた。中也には『ランボオ詩集』『ランボオ詩抄』という訳詩集があるし、詩趣が似ているので（文壇の異端児という点でも似ているので）、しばしば「日本のランボー」と称されるが、その根底には「歩く詩人」という共通点がある。深海、地底、砂漠、南極・北極、火山・高山など、世界の辺境を歩いてきた僕には（深海は歩けないが）、そう思えるのだ。

寒い詩人

夜の街を徘徊するくせに、中也はよほど寒がりだったのか、「寒い」という語の使用が多い。有名な「冬の長門峡」という詩は、「寒い寒い日なりき」の連で始まり、終わる。この詩は、定稿こそ最初と最後だけ「寒い寒い」ですんでいるが、第一稿では六連すべてが「寒い寒い」だったと指摘されている[1]。もうひとつ、「寒い！」という直裁的な題の詩はのっけから「毎日寒くてやりきれぬ」とこぼしている。

僕は、この原稿を南極で書いている。第52次南極地域観測隊の夏隊で南極に来ているのだ。南極観測は三回目だが、日本隊で来たのは初めて、今回は中也の詩集を持ってきた。読めば「寒い」の連発。実は、僕も寒さに弱いので、同類相憐れむという気持ちである。ただ、「寒い夜の自我像」という詩の最後で「日光と仕事とをお与へ下さい！」といわれても、夏の南極は陽の沈まない白夜だ。皮肉なことに日光があっても寒い。

南極観測隊といえば、屈強で剛健な猛者を想像されるかもしれない。確かに、そういう隊員はいる。しかし、そうでない男性隊員もいるし、最近では女性隊員も珍しくはない。猛者云々はさておき、体質や体調について医学検査に合格しないと隊員になれない。ところが、今回の観測隊は、医療隊員（医師）も含めて、昔の徴兵検査でいう甲種合格に相当すると思われる「適」が一人もいなかった。丙種合格に相当すると思われる「慨適」ばかりだ。まあ、働き盛り、すなわち飲み食い盛りの人材を集めたのだから、いま流行のメタボ判定に引っ掛かってしまったのだろう。あっ、僕は働き盛りというよりただの呑み過ぎで引っ掛かった。

さて、徴兵検査といえば、中也はどうだったのか。中也が生きた時代には大きな戦争があった。一度目は第一次世界大戦（1914～1918）、徴兵令にもとづく国民皆兵の時代だったが、中也は幼少のため兵隊にとられなかった。1927年4月1日、徴兵令に代わって兵役法が公布され、日本人男子は満二十歳になると徴兵検査が義務づけられた。兵役法の公布は中也がちょうど二十歳になる四週間前である、当然、中也も徴兵検査を受けねばならない。ところが、徴兵検査の結果はもとより、中也がそれを受け

たかどうかも分からないのだ。佐々木幹郎氏は「中原はどうも不合格だったようにわたしには思えます」と述べている（「中原中也の会」会報第六号）。

ちょっと脱線したので、「寒い」話に戻る。

詩のなかで特定の単語が多いとき、その出現率などを調べることで詩の理解をたすける方法があるそうだ。計量文献学という研究分野の数量的方法である。これを用いて、吉竹博氏[1]は『山羊の歌』と『在りし日の歌』の計一〇二篇の詩について、寒い・温かいなどの温度感覚をあらわす言葉を数え上げた。その結果、やはり、中也の詩は、他の詩人の作品に比べて、冷覚に関する言葉の出現頻度が高いということがわかった。

冷系の言葉が多いから何だ、言葉は字義でなく象徴で捉えるものである、との批判もあるだろう。しかし、吉竹氏は「高い次元の話をする前に、まず低い次元の身体感覚といった側面をおさえておく必要がある」と主張する。要素還元主義にもとづく近代科学者のひとりとして、僕もそう思う。中也はよく「夭逝の詩人」と呼ばれるが、それは中也の一生という観点からの評価であり、むしろ、身体感覚の視点から「寒い詩人」というほうが中也の詩風をよく表している。

科学嫌い？

まさか自分の詩が数量的に分析されていることを知ったら、中也は何と毒づいただろうか。中也は科学が嫌いだったようである。少なくても好意的ではなかった。三十歳の頃の草稿詩でこう詠んでいる。

甞てはラムプを、とぼしてゐたものなんです。
今もう電燈の、ない所は殆んどない。
（中略）
吁、科学……
こいつが俺には、どうも気に食はぬ。
「（甞てはラムプを、とぼしてゐたものなんです）」

家の三毛猫に「やい、哲学者！」（『名言 中原中也』p.124）と怒鳴るように、生命科学で糊口をしのぐ僕には「やい、科学者！」と浴びせるだろうか。待望の長男・文也に初めて会ってから一週間後に書いた草稿詩「星とピエロ」には、こうある。

それあ学者共は、地球のほかにも地球があるなぞと
いふが
そんなことはみんなウソぢや、銀河系なぞといふの
もあれは
女共の帯に銀紙を擦り付けたものに過ぎないのぢや
「星とピエロ」

現在では「われわれの太陽系」以外にも同じような太陽系があり、そこに惑星、いわゆる系外惑星もたくさん発見されている。なかには「スーパーアース」という地球型の系外惑星もあって、そこに生命が存在すること、とくに知的生命体が文明を築いていることが期待されている。学者はウソをいったわけではないのである。でも、したり顔でそんなことをいったら、中也はますます科学が嫌いになり、科学者を罵倒するかもしれない。

中也はどうして科学が嫌いなのだろう。科学のせいで電灯が夜の闇を明るく照らすからだろうか。不可知論的な薄暮――たとえば、月でウサギが餅をつくようなこと――を残しておきたかったのだろうか。自然界のことも人間界のことも、何でも理解し、説明したがる無垢な知性が気に入らないのだろうか。それは、かつて中也が得ようとして得られなかった詩郷の境地と裏腹なのかもしれない。だから反発し、失望し、焦ったのではないだろうか。それが『山羊の歌』の詩に現れているように思える。

人間に分らない無数の理由が
あれをもこれをも支配してゐるのだ
（中略）
夜は夜とて星をみる
あゝ　空の奥、空の奥。
「憔悴」
暗き空へと消え行きぬ
わが若き日を燃えし希望は。
夏の夜の星の如くは今もなほ
遐きみ空に見え隠る、今もなほ。
「失せし希望」

空の詩人

中也は二十歳になる二日前の日記に「宇宙の機構悉皆了知」と書いた。でも、中也の詩に宇宙的な広がりはない。それどころか、宇宙に近い意味で、空の上にある世界としての〈天〉という言葉もほとんど使われていない。その代わり、〈空〉の出現率は相当に高い。「空の詩人」ともよばれる所以である。

中也の詩の空間はほとんど〈空〉が上限であり、これに〈海〉という水平成分も加わることが多い。たとえば、前出の「憔悴」という詩はこう終わっている。

あゝ　空の歌、海の歌、
僕は美の、核心を知ってゐるとおもふのですが
それにしても辛いことです、怠惰を追れるすべがない！

〈空〉までは歌えても、〈天〉は歌えなかった。それは怠惰の故である。だから頑張る、というのではなく、だから拗ねるのである。だから、宇宙神ジュピターの居場所さえ、素直に〈天〉とよべないのである。

上の上の空でジュピター神の砲が鳴る。
「冬の明け方」

歩く寒い空の詩人

――吟遊科学者がみた中原中也

中也が天を眺めるとき、努力しても到達できないという、努力した者だけがもてる諦観はない。むしろ、怠惰な者が「そんなの関係ねえ」とでも云いたそうな疎外感が漂っている。たとえば、「秋の夜空」という詩がある。秋の夜空は下界から見上げると、明るく目立つ星のないスター不在で、うら寂しい。しかし、上天界は明るく楽しそうだ。が、「そんなの関係ねえ」と背を向ける中也である。

これはまあ、おにぎはしい、
（中略）
下界は秋の夜といふに
上天界のにぎはしさ。

「秋の夜空」

ランボーも天界への昇華を夢見ながら折れいく魂の叫びを吐いた。十七歳のときの「高い塔の歌」という詩である。

何事にも屈従した
無駄だつた青春よ、
繊細さのために
私は生涯をそこなつたのだ。
あゝ！　心といふ心の
陶酔する時の来らんことを！

「最も高い塔の歌」中原中也訳

時よ、来い
あゝ、陶酔の時よ、来い。

「てっぺんの塔の歌」小林秀雄訳

小林秀雄の訳のほうが断然よい。やはり中也は小林に叶わないのだ。中也が〈空〉で、小林が〈天〉なのである。「中原が〈魂〉なら小林は〈精神〉なのである」[2]というのと、まさに呼応する。

サン＝テグジュペリの『人間の土地』（堀口大學訳）の第四章「飛行機と地球」には、空の高みに上ってはじめて見えてくる地球の真の姿が示されている。地を這う者たちが真実に対していかに無知であるか。サン＝テグジュペリは、パイロットとして、雲の上の世界を知っていた。雲を突き抜けて雲上界にでると、さらに高く星々が煌めく天上界があることも知っていた。しかし、雲上界には行けても、天上界には行けない。「夜間飛行」という作品はそんな人間の限界を描いた。努力しても到達できないことを諦観し受容する、それがサン＝テグジュペリの特徴だと思う。

これに比べれば、中也の〈空〉は垂直的というより水平的である。もっと直接的な〈海〉や〈地平線〉などの水平思考の言葉も多用されている。

あれはとほい処にあるのだけれど
おれは此処で待つてゐなくてはならない
（中略）
しかしあれは煙突の煙のやうに
とほくとほく　いつまでも茜の空にたなびいてゐた

「言葉なき歌」

地平の果に蒸気が立つて、
世の亡ぶ、兆（きざし）のやうだつた。

「少年時」

そして、小林秀雄に託し、死後に出版された『在りし日の歌』の最終詩「蛙声」では、ついに池の水面にまで魂が圧縮されてしまった。

天は地を蓋ひ、
そして、地には偶々池がある。
その池で今夜一と夜さ蛙は鳴く……

「蛙声」

魂が伸び伸びしているときの中也はすごかった。絶頂期に著した「芸術論覚え書」では「名辞以前」が詩心だと喝破し、こう断言している。

「これが手だ」と、「手」といふ名辞を口にする前に
感じてゐる手、その手が深く感じられてゐればよい。

名辞とは概念を言葉で表現したものであり、「名辞以前」とは言葉にする前の概念そのものである。ランボーも詩法論「見者の手紙」で似たようなことを書いた。ならば、僕も、名刺の肩書きに凝ることはないだろう。吟遊詩人ランボーにあやかって付けた「吟遊科学者」という肩書きだが、中也にならって名辞に拘るのをやめた時こそ、僕は真の吟遊科学者になれるような気がする。中也の気に入られる科学者に。

参考文献
[1] 吉竹博『中原中也 生と身体の感覚』、新曜社（1996）
[2] 饗庭孝男『夢想の解読　近代詩人論』、美術公論社（1983）

写真／山崎エリナ

長沼　毅〈ながぬま・たけし〉
広島大学大学院生物圏科学研究科（生物生産学部）准教授。
専門分野は、深海・地底・南極・北極・砂漠など極限環境の生物学、生物海洋学。
昭和36年4月12日生（人類初の宇宙飛行の日に生まれた）。
筑波大学大学院博士課程生物科学研究科修了後、海洋科学技術センター（現・独立行政法人海洋研究開発機構）研究員を務め、現在に至る。
主な著書に『生命の起源を宇宙に求めて〜パンスペルミアの方舟』（化学同人）、『辺境生物探訪記〜生命の本質を求めて』（光文社新書）、『宇宙がよろこぶ生命論』（筑摩書房）、『長沼さん、エイリアンって地球にもいるんですか？』（NTT出版）、『深層水「湧昇」、海を耕す！』（集英社）、『深海生物学への招待』『生命の星・エウロパ』（日本放送出版協会）、監修に『深海生物大図鑑』（PHP出版）がある。

寄稿

金沢の中也のこと二三

金沢ふるさと偉人館館長　松田章一

平成22年9月18日から11月7日まで金沢ふるさと偉人館で「中原中也展」が開催され、多くの人々の目を楽しませた。

金沢ふるさと偉人館は、中也の金沢時代に通園した北陸女学校付属幼稚園の跡地に建っているので、「中也が遊んだ金沢の幼稚園にて」という副題を付けた。また中也が金沢に来たのが百年前、去ってから九十七年になるので「百年ぶりに中也がかえる」とも題した。展示品のほとんどは中原中也記念館から借りて展示したものだが、金沢で見付けた資料も加えたので、その二三を紹介したい。

神明館について

「神明館（字は違ふかも知れない）といふ映画館があつた。其処の弁士の子供が幼稚園の同級にゐて、時々フイルムの切れつぱしを持つて来てみんなを羨しがらせた。」（金沢の思ひ出）

大正2年5月22日の『北國新聞』に次のような記事が載っていた。

「●神明館の開館　市内野町一丁目清水鐵次郎、三由安太郎、樋詰太三郎、増泉孫次、太田次吉、若林純二六氏の發起経営にて神明社境内に建設せる寄席神明館は愈よ工事落成を告げ本日正午より市内知名の有志等を招き盛んなる開館式を擧げ引続き舞台開として大阪文楽座司太夫、娘義太夫豊竹愛之助一行にて花々しく開演すべく西北廓事務所及び芸妓連より贈れる引幕緞帳をも披露する由なれば定めし大人気を見るなるべく語物左の如し

御祝儀（入登）鈴ケ森（朝子）忠臣三（越柳）二度目（豊若）玉三（清鶴）壺坂（愛之助）（以下略）」

この年、金沢にはほかにも劇場や映画館が開場し、映画が金沢に流行し始めた年である。8月12日に白菊町に北国劇場がオープン。10月30日には香林坊に活動写真常設館菊水倶楽部がオープンし「主任弁士関楓葉ほか補助弁士」とある。すでに金沢にも活動弁士がいたのだ。

金沢を歌った中也の短歌

中也が金沢を詠んだ短歌は3首といわれている。

25　買物に出かける母に連れられし
　　金沢の歳暮の懐しきかな

92　出してみる幼稚園頃の手工など
　　雪溶の日は寂しきものを

93　犀川の冬の流れを清二郎も
　　泣いてきゝしか僕の如くに

（番号は『新編中原中也全集』による）

いずれも16歳の山口中学の時、金沢の幼稚園時代を思い出して詠んだ大正11年3月制作と推定されている作品である。

25と93は明らかに金沢の思い出を詠んだもの。93の「清二郎」とは『地上』の作者、美川出身の島田清次郎のことだが、「僕の如くに」がよくわからない。『地上』は大正8年に出版、たちまちベストセラーになった。中学生の中也も読んだと思われる。島清（しませい）にたいしてどんな文学的感応があったものか。92の幼稚園も「雪溶」とあるから金沢のことと推定されている。

ところで次一首も金沢を詠んだものと思われる。

98　向ふ山に人のぼるみゆヂラヂラと
　　春近き日の光まばゆくて

旧全集の註には「ヂラヂラと」を「ギラギラと」との誤植とも考えられるが改めなかったとある。ヂラヂラとかヂリヂリとかは、金沢弁で陽差しの強いことを言う。今はあまり使わない言葉だが、幼い中也の心に残った特別な金沢弁だったのだろう。「向ふ山」は金沢では「夢香山」とも「向い山」とも呼んでいる卯辰山の事と思われる。

この二点で金沢を詠んだものと推定する。

卯辰山は兼六園の眺望台から眺めるのが一番よく山を登る人も見ることができる。特に兼六園の記憶としなくてもいいのだが、兼六園には昭和7年の金沢再訪の時も訪ねていて、大和武尊の銅像の近くの眺望台にも立ったに違いない。

この時は、卯辰山北端の小坂神社にも行っている。「小坂神社に行つた。境内の杉の樹に、長さ二寸もある蛞蝓（なめくじ）がゐた。それも忘れてゐたが、やがてボンヤリ思ひ出せるやうな気がした。その裏の高くなつて赫土（あかつち）の露（む）き出しになつてゐる所は、削り方まで昔のまゝであるのにはなんだか異様な気持がした。幼稚園のピクニックで来た時に、嘗てすべつてころんだ所も、そのまゝであつた。」

ただし、「向ふ山」の北の山裾にある小坂神社は金沢名所とは云えない。兼六園から見える場所でもない。また昇るというほどの高さでもない。

この一首の風景は、雪の溶けた向ふ山を昇って行く人がいる。強いヂラヂラとした日差しをうけて金沢独特の黒い屋根瓦がきらきら輝くその彼方に、という長い冬を過ごした金沢の人々の喜びの心を詠んだものと解したい。

幼稚園の先生

この幼稚園は、アメリカ長老教会宣教師ミス・フランシナ・E・ポーターによって明治19年10月11日、私立英和幼稚園として設立された。明治39年に園長となったミス・ジャネット・M・ジョンストン（1873（明治6）年英領カナダ生まれ）は、明治45年3月に英和幼稚園を北陸女学校付属幼稚園と改称した。ジョンストンはこの後、女学校々長を辞したが、幼稚園々長はそのまま大正10年まで勤め、富山、高岡（大正2開園）の三幼稚園の園長も兼務した。大正2年当時は40歳。

通信簿に連絡事項を書いていた主事の内藤徳（旧姓大山）は、明治42年9月より大正12年3月まで在職、受持保母の平野雪は明治44年4月より大正3年12月まで勤めた。なお名簿で確認できるかぎりでは、他に平野と同時に採用された木村信、佐々木久尾子、柴山桂の3名の保母がいた。

第８回　常設テーマ展示

これが私の故里だ

Yuda Yamaguchi

平成23年2月16日(水)～平成24年2月12日(日)

生まれた場所、育った土地、人はそれをふるさとと呼び、特別な思いを抱きます。

詩人・中原中也のふるさとは山口です。大内文化が栄え、毛利氏が移り住み、明治維新で傑出した人物が往来した地、湯田温泉に生まれました。

中也は、2歳から6歳までは広島・金沢で過ごしましたが、小学校入学の頃から、京都の立命館中学に転校するまで、6歳から15歳までの9年間は山口で過ごしています。

京都、東京、鎌倉と、この地を離れてからも、たびたび帰郷し、30歳で「いよいよ詩生活に沈潜」するため「郷里に引籠る」と決心した中也。

中也の故郷である山口と、故郷への思いと、その思いが込められた詩を、当時の写真とともに紹介しました。

1 故郷―これが私の故里だ

中也が生まれ育った湯田温泉。中原医院の様子、中也が通った小学校や自宅近くにある高田公園、養祖父・政熊が建立に尽力したサビエル記念碑や、父・謙助が関わった七卿の碑、中原家のお墓と菩提寺がある吉敷、中原家に縁のある石碑を、詩「三歳の記憶」「幼かりし日」「少年時」「骨」などとともに紹介しました。

《主な展示資料》中原医院で使用した薬瓶　中也小学生の頃の答案用紙・習字　中也原稿「〈履歴書〉」「その頃の生活」「少年時」「一つの境涯」

2 帰郷―田舎だってヒト味です。

中也は中学3年で、京都の立命館中学に転校します。16歳から家を出てはいますが、夏休みと冬休みには帰省していました。18歳で東京へ移ってからも、たびたび帰省していたようです。学校の休み以外にも帰ることがありました。父・謙助のお見舞い、弟・恰三のお見舞いやお葬式のため、友人・安原喜弘を郷里に招いて案内するため、友人・高森文夫の郷里である宮崎へ旅行に行くため、お見合いと結婚、第一子の誕生のため…。

その頃、湯田温泉には、昭和3年に湯田温泉株式会社が設立、大きな浴場・千人湯や撞球場（ビリヤード場）、池にボートを浮かべる娯楽場ができます。また、昭和9年には競馬場ができ、多くの客で賑わいました。

山口の三大祭りは、山口祇園祭、山口天神祭、山口七夕ちょうちんまつりですが、帰ってきてお祭りに行ったことを、中也は手紙で友人に書き送っています。

中也の帰省と、その頃の山口の様子を、詩「死別の翌日」「修羅街輓歌」「頑是ない歌」「冬の長門峡」などとともに紹介しました。

《主な展示資料》中也筆安原喜弘宛はがき・竹田鎌二郎宛書簡　中也原稿「冬の長門峡」「詩的履歴書」

3 望郷―詩生活に沈潜しようと思ってゐる。

昭和11年11月10日、愛児・文也が2歳で病死します。中也は深く悲しみ、神経衰弱となって入院。退院後は、文也の思い出が残る東京の家から離れ、友人たちの住む鎌倉へ引っ越します。

鎌倉では、旧友たちとの交友を再開し、教会へ通い、読書をする日々を送ります。

遠方の友人たちに手紙で帰郷の決意を知らせ、10月には山口へ帰るつもりでいた中也ですが、結核性脳膜炎にかかり、10月6日に鎌倉養生院へ入院、22日にこの世を去ります。

友人へ帰郷の決意を知らせる手紙や、文也を亡くした7日後に書かれた詩「暗い公園」などを紹介しながら、帰郷にあたっての中也の心境に触れました。

《主な展示資料》机（中原家兄弟が小学校時代使用）　丹前（中也が帰省の折に着用したもの）　中也筆阿部六郎宛書簡・後藤信一宛書簡・安原喜弘宛書簡　『在りし日の歌』　中也原稿「四行詩」

中原中也記念館 特別企画展

河上徹太郎と中原中也
――その詩と真実

平成22年7月23日(金)～10月3日(日)

平成22年は、中也の友人であり、日本を代表する文芸評論家・音楽評論家である河上徹太郎の没後30年にあたります。

山口県岩国の名家出身、中也と同郷にして、評論家としての道を歩みはじめていた徹太郎と、当時まだ無名の詩人・中原中也。若き日々に、突如あらわれ消えていったこのひとりの詩人について、徹太郎はその長い評論家人生のなかで、幾度となく回想し、独自の言葉で語っています。

当館では、平成20年11月から同22年3月にかけて、岩国の河上旧宅を7回にわたり調査しました。そこで確認された資料を軸として、展示では、雑誌「新潮」で長く徹太郎の担当編集者をつとめられた坂本忠雄氏にご監修いただき、河上徹太郎という人物の生涯と、徹太郎により語られた中也の姿に改めてスポットを当てて紹介しました。

1 徹太郎、誕生
――岩国のさむらい

明治35年、河上徹太郎は、日本郵船技師の父・邦彦と敬虔なクリスチャンの母・ワカの間の一人っ子として生を享けます。邦彦の仕事の関係で、生まれこそ長崎でしたが、河上家はもともと岩国藩（現・山口県岩国市）に仕える武士の名家であり、徹太郎は生涯を通じ、たびたび岩国の旧宅を訪れました。現存する旧宅には、その家柄を偲ばせる貴重な資料が多数保管されており、徹太郎に息づく侍精神の源流を見ることができます。

徹太郎が中学生の頃、父の転勤により一家は上京、一級下に小林秀雄のいる東京府立第一中学校に編入します。この頃、学校に隠れて通ったという浅草オペラにより音楽へと関心を向けた徹太郎は、ピアノの勉強をはじめ、東京帝国大学在学時に初めて商業雑誌に音楽評論を発表。これにより、音楽評論家として世間に名乗りを上げました。

ここでは、徹太郎の誕生から、彼の文壇デビューまでの経緯を紹介しました。

《主な展示資料》河上家伝来の鎧兜、勝海舟筆書幅、河上家系図 など

2 徹太郎と中也
――2人のアウトサイダー

昭和2年春、小林秀雄の紹介により、中原中也と知り合います。徹太郎25歳、中也20歳の時でした。〈此の種の詩を、見せたい人を君においてだけ持つてゐる〉と添えて、はじめて中也から贈られたという詩「地極の天使」に対し、徹太郎は《魂の中まで見透された気がした》と言い、出会って間もないながら、2人が互いに共鳴し合う部分をもっていたことがわかります。その後、中也発案、徹太郎編集による同人雑誌「白痴群」を創刊するなど、文学的にも深い交遊を結びました。

出会いから10年、中也はわずか30歳でこの世を去りました。中也の死の1年後に書かれた徹太郎の評論「中原中也の手紙」には、「地極の天使」をはじめ、中也から徹太郎に贈られた14通の手紙が引用されています。手紙そのものは戦火で焼け現存しませんが、この評論に引用されたためにその文面が残されました。徹太郎により伝えられた中也の言葉からは、当時の2人の間に漂う空気が感じられます。

ここでは、徹太郎と中也の出会いと交流について紹介しました。

《主な展示資料》中原中也「詩的履歴書」草稿、「我が生活」

草稿、「河上に呈する詩論」草稿、中原中也「新文芸日記」、「ノート小年時」、正岡忠三郎日記、河上徹太郎『叡智』、『自然と純粋』など

3　徹太郎のひきだし

今回の河上家調査により確認された資料には、徹太郎の蔵書のほか、名だたる文人たちからの献呈署名本、手紙、写真、遺品の数々があります。

ここでは、初公開となる資料を中心に、中也の死後およそ40年にわたり多方面で活躍した徹太郎の業績を、5つのパートに分けて紹介しました。

【ひきだし ― 岩国・河上家旧蔵品】

河上家に遺された、徹太郎愛用の品々や蔵書を展示し、書斎の雰囲気を伝えました。徹太郎の3千冊にもおよぶ蔵書の中には、これまで手紙などと一緒に焼失したと思われていた、中也筆徹太郎宛献呈署名入り『山羊の歌』（限定番号15番）も確認され、本邦初公開となりました。

《主な展示資料》徹太郎使用のひきだし、愛用の印鑑、河上用箋、河上家伝来の和本箱、「名橋正宗」酒壺、「名橋正宗」芳名録※、中也筆徹太郎宛献呈署名入り『山羊の歌』など

※「名橋正宗」は、河上家の親戚にあたる岩国の塩屋酒蔵醸造の日本酒。徹太郎はこの酒を愛し、これが名酒であることに同意した小林秀雄ら友人に署名を求めた。

【ひきだし ―― 文明批評】

文明批評の傑作とも言われる『有愁日記』には、中也の死後、徹太郎の経験した戦争についての記述があります。決して多くは語られませんが、戦中・戦後の批評活動は良くも悪くも、徹太郎の評論家人生に深い爪痕を残すことになりました。

ここでは、戦時下に結成された日本文学報国会での活動や、「文学界」誌上で開催され、徹太郎が司会をつとめた座談会「近代の超克」、戦後評論「配給された自由」などについて紹介しました。

《主な展示資料》『近代の超克』「文学界」第9巻第10号、『有愁日記』、第3回日本文学大賞受賞記念時計（『有愁日記』により受賞）など

【ひきだし ―― 音楽評論】

中也や小林秀雄らとの交遊の中で次第に文学へと接近した徹太郎ですが、生涯を通じて音楽評論も数多く書き残しています。中でも、モーツァルトの歌劇を論じた代表作『ドン・ジョヴァンニ』における〈言葉〉の問題は、ヴェルレーヌの「言葉なき恋歌」から中也の「言葉なき歌」へと繋がるものがありました。

こうしたところに、さまざまな〝ひきだし〟を持ちながら、それぞれがまったく独立せず、根本で深く連関して語られる徹太郎評論の特徴がうかがえます。

《主な展示資料》徹太郎署名入り『ドン・ジョヴァンニ』、徹太郎使用の楽譜、講演原稿「音楽の中の人間像」、「演芸画報」合同第6年第4号 など

【ひきだし ―― 文芸評論】

文芸評論家として歩む中で、徹太郎はしばしば中也について論じました。その幅広い見地と深い教養から語り出される中也の姿は、《日本のアウトサイダー》など、河上徹太郎独特の中也観として現在まで読み継がれています。

また、中也の母・フクをはじめ、中原家の人々から絶大の信頼を得ていたという徹太郎。昭和40年、中原家にほど近い高田公園に建立された中也詩碑「帰郷」除幕式に出席した際の様子を通じて、同郷人としての2人を紹介しました。

《主な展示資料》『私の詩と真実』、第5回読売文学賞受賞記念祝賀会芳名帳、『日本のアウトサイダー』、『わが中原中也』、徹太郎編『中原中也詩集』（角川文庫）、中原フク筆色紙

【ひきだし ―― 郷里・岩国】

晩年、徹太郎の関心は史伝へと注がれます。『吉田松陰』を皮切りとして、より無名の維新志士たち、最終的に自らに連なる父祖について言及します。徹太郎にとってそれは自分自身を語ることに他ならず、自分という存在のルーツを郷里・岩国に求めたのだとも言えるでしょう。

徹太郎は岩国市名誉市民に選出され、昭和55年、78歳で死去した際には岩国市葬が執り行われました。河上家の菩提寺である岩国の普済寺にて、今も静かに眠っています。

《主な展示資料》『吉田松陰 武と儒による人間像』、『厳島閑談』、徹太郎宛司馬遼太郎筆書簡、井伏鱒二・小林秀雄・三好達治筆書簡、河上家伝来の備前焼花瓶、岩国名誉市民認定賞状

亡くなる前年の雑誌のインタビューにて、《ぼくにとっての日本文学は、中原中也と小林秀雄だけでいい》と語った徹太郎。徹太郎にとっての中也の存在の大きさが伺われる一節です。

企画展ピックアップ

企画展Ⅱ 中也の住んだ町 ――中野・高円寺

平成22年10月6日(水)～平成23年1月23日(日)

中也は大正14年、東京の中野に暮らし始めます。その後、引っ越しを繰り返しながらも、中野・高円寺近辺に約3年半住んでいました。その間、友人・富永太郎の死、泰子との離別といった、悲劇的な出来事が立て続けに起こった一方で、生涯を通して交遊を続けることになる河上徹太郎や大岡昇平ら友人たちとの出会いや、代表作「朝の歌」の制作など、詩人として本格的に始動した時期でもありました。

中野・高円寺といえば、どちらも中央線沿線の街です。中也が住んでいた頃はちょうど中央線の利用客が急増していた頃でした。昭和に入ると、『荻窪風土記』を著した井伏鱒二をはじめ、太宰治、古谷綱武、三好達治、上林暁など、文学者が多く居を構え、中央線沿線文士という名称までつくられるほどになります。

本展では、中野・高円寺に住んでいた18歳から21歳までの中也を中心に紹介しました。また、井伏鱒二らが中心となって結成された文士の集い《阿佐ヶ谷会》を通じて、中央線沿線の文学者群像についても紹介しました。

（写真提供：中野区）

1 中野

ここでは、長谷川泰子とともに住んだ中野の住居とそこで起きた出来事を紹介しました。

大正14年3月、京都の立命館中学を修了した中也は、大学予科受験のため、同棲中の女性・長谷川泰子とともに上京します。受験は書類不備や遅刻でことごとく不調に終わりましたが、二人はそのまま東京で暮らすことにして、中央線・中野駅近くに家を借りました。中也の友人・小林秀雄と泰子が出会ったのもこの家です。

《主な展示資料》中也筆正岡忠三郎宛書簡（大正14年4月26日）

2 高円寺

ここでは、高円寺での小林秀雄との交流や、そこで起こった二つの悲劇、富永太郎の死、長谷川泰子との離別を紹介しました。

中野に住んで1ヶ月ほどで、中也と泰子は、小林の家に近い高円寺の下宿に引っ越します。中也と小林は毎日のように会っては文学論をたたかわせました。しかし、そのような親密な交遊の中、小林は中也の恋人である泰子に心を奪われます。小林の「手記断片」には当時の複雑な心境が赤裸々に綴られています。

大正14年11月、京都時代からの友人・富永太郎が結核で亡くなります。享年24歳。早すぎる死に中也は動揺しました。富永の死に立ち会った友人・正岡忠三郎の日記には、富永の死の翌日、「2晩寝なかった」と青い顔をして富永家にやって来た中也が出てきます。

そして、それからまもなく、泰子が小林のもとに去っていきました。中也はのちにこの体験をもとに、散文「我が生活」を書きました。

《主な展示資料》中也評論草稿「地上組織」、中也散文草稿「我が生活」、雑誌「山繭」

草稿「我が生活」

昭和初期 中野駅北口通り（写真提供：中野区）

3　再び中野へ

ここでは、再び中野へ移り住んでからの小林との交流や、友人たちとの出会いを紹介しました。

友人と恋人を失った中也は、中野で孤独な生活を強いられました。当時の手紙には、その苦しみが綴られています。しかし、そのような生活の中で、詩人としての第一歩を示す記念碑的作品「朝の歌」を生み出します。そして小林との交流も再開し、さらに河上徹太郎や諸井三郎、大岡昇平ら友人たちとの出会いもありました。

《主な展示資料》中也評論「小詩論」「小林秀雄小論」、中也散文「詩的履歴書」、同人誌「スルヤ」

4　詩と日記
―中野・高円寺の頃

ここでは、中野・高円寺時代に書かれた中也の詩と日記を紹介しました。

中也自身、詩人としての出発点に位置づけた詩「朝の歌」の制作が、中野在住時に始められたことに象徴されるように、中野・高円寺時代は詩人・中也が本格的に始動した時期でした。中也の第一詩集『山羊の歌』の「初期詩篇」パートに収録された詩のうち、約3分の2の初稿は中野・高円寺在住の頃に制作された可能性があります。

現存している中也の日記で最も古いのが、昭和2年に使用された「新文芸日記」です。中也が中野に住んでいた頃に書かれたこの日記には、人生訓的断片や文学論、読書記録などが綴られており、当時の中也がどのようなことを考え、悩んでいたかが伺えます。

《主な展示資料》「新文芸日記」、佐藤春夫『退屈読本』など昭和2年の中也日記に記されている本

5　《阿佐ヶ谷会》

ここでは、中央線沿線の文学者群像の一例として、《阿佐ヶ谷会》のあらましとメンバーの著書などを紹介しました。

作家の井伏鱒二は、昭和2年、中央線沿線の荻窪に居を構えます。その井伏が中心メンバーとして関わったのが《阿佐ヶ谷会》とよばれる文学者の集まりです。昭和初年代に将棋会として始まったこの会は、阿佐ヶ谷・荻窪・高円寺周辺に住む文学者たちが多く集い、約40年続きました。

《主な展示資料》井伏鱒二『荻窪風土記』太宰治『風の便り』、外村繁『阿佐ヶ谷日記』

このほかに、展示2に登場する音楽団体「スルヤ」のメンバーが中也の詩につけた曲の演奏や、中也の友人・関口隆克の講演録音のうち中野在住当時の中也について語った部分を聴くことが出来るコーナーを設け、耳からも展示を楽しんでいただけるよう工夫しました。

昭和初期 中野駅北口
（写真提供：中野区）

企画展
ピックアップ

企画展Ⅲ 中也が読んだ本

平成23年1月26日(水)～4月17日(日)

中也はたいへんな読書家でした。「本を読めよ、とにかく読むんだ。(中略)本を買って呉れなければ家中暴れ廻ってやれ」と小学生の弟に言っていた中也。29歳の日記には「俺は今日迄に五六千冊は読んでゐる」と書いています。

中也の蔵書は、残念ながらほとんど失われていますが、当館では中也の読んだ本と同版の本を収集してきました。また、平成22年11月、中原中也宛献呈署名入りの本『悲劇の哲学』をご寄贈いただきました。

今回の展示では、これらの本を中心に、中也の読書とそれが中也に与えたであろう影響などについてご紹介しながら、読んだ本を通して見えてくる中也の新たな側面を探りました。

1 読書家中也

ここでは、中也の読む本の傾向やこだわりなどについて、周囲の人々の証言や中也自身の詩・日記などのことばから抜き出し、展示しました。

中也が中学生の頃からすでに読書が大好きであったことは、母・フクが語っています。中也の中学での成績が落ちた時、担任の先生は、中也が本を読みすぎるのが原因だとして、中也に本を買ってやらないよう、フクに伝えました。フクがその言葉に従って中也に本を買い与えるのをやめると……

中也は書店にいって立ち読みをしはじめました。それで帰りが遅うなると、中也はもう家の生垣のむこうから、「お母さん、ぼく立ち読みしたから遅うなったんじゃあありませんよ」って、大きい声でいいながら帰ってきよりました。

(中原フク述、村上護編『私の上に降る雪は　わが子中原中也を語る』)

中也の読書好きを示す茶目っ気のあるエピソードです。

雑誌「作品」昭和11年12月号に掲載された中也の詩「現代と詩人」は、暗く希望のない現代において、詩集を読もうと読者に呼びかけています。

さあさあ僕は、詩集を読まう。フランスの詩は、なかなかいいよ。
鋭敏で、確実で、親しみがあつて、とても、当今日本の雑誌の牽強附会(けんきょうふかい)の、陳列みたいなものぢやない。それで心の全部が充されぬまでも、サッパリとした、カタルシスなら遂行されて、ほのぼのと、心の明るむ喜びはある。

2　中也が読んだ本

ここでは、中也が読んだ本のなかでも、特に中也に影響を与えたものや、日記などに何度も名前が登場しているものをピックアップして紹介しました。

高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』や宮沢賢治『春と修羅』を中也が愛読していたことは比較的よく知られていますが、実はチェーホフの小説や戯曲もよく読んでいました。

小林秀雄はエッセイ「或る夜の感想」のなかで、戯曲「三人姉妹」の登場人物の一人（チェプトゥイキン）の台詞を口にして、周囲を閉口させる中也の姿を描いています。

死んだ中原中也は、酔ふとチェプトゥイキンの台詞を口にするのが好きだつた。「事によつたら、俺つて奴は、まるで存在してゐないのかも知れないぞ。歩いたり、食つたり、寝たりしてゐる様な気がするだけかも知れないぞ」――彼がやり出すと、みんな閉口した。それは下手な声色にもなつてゐなかつた。面白くもをかしくもなく、聞いてゐると、薄つ気味が悪く、厭ァな気持ちになつて来る。

（小林秀雄「或る夜の感想」）

3　発見！　中也の蔵書

ここでは、平成22年11月にご寄贈いただいた中也宛献呈署名入り『悲劇の哲学』とその著者・翻訳者、および時代背景などについて紹介しました（『悲劇の哲学』について詳しくは16ページの「新収蔵資料紹介」をご覧下さい）。

本展の展示資料のうち、文字通り実際に中也が手に取って読んだ本はこの『悲劇の哲学』のみです。この度のご寄贈は、展示開催のタイミングとぴったりあって、まさにタイムリーでした。

最後のコーナーには、中也が読んだ本リストと、それらの本のうち5点を展示しました。

展示で紹介した中也が読んだ本

高橋新吉著／辻潤編『ダダイスト新吉の詩』
高橋新吉『ダダ』
宮沢賢治『春と修羅』
Arthur Rimbaud “Œuvres de Arthur Rimbaud”
上田敏『上田敏詩集』
ヴェルレーヌ著／堀口大学訳『ヴエルレエヌ詩抄』
ヴェルレーヌ著／川路柳虹訳『ヴエルレーヌ詩抄』
ヴェルレーヌ著／河上徹太郎訳『叡智』
チェーホフ著／米川正夫・本郷保雄訳『近代劇大系』第14巻　露西亜篇（2）
チェーホフ著／広津和郎訳『六号室』（チエホフ全集第2編）
チェーホフ著／神西清訳『チエーホフの手帖』
西田幾多郎『自覚における直観と反省』
ニーチェ著／安倍能成訳『この人を見よ』
ニーチェ著／登張竹風訳『如是我聞　ツァラトゥストラー』
シェストフ著／河上徹太郎・阿部六郎訳『悲劇の哲学』
阿部六郎『深淵の諸相』
シェストフ著／河上徹太郎訳『虚無よりの創造』
河上徹太郎『自然と純粋』
リルケ著、茅野蕭々訳『リルケ詩抄』
辻潤『ですぺら』
「中央公論」昭和7年2月号（嘉村礒多「途上」掲載）
フィードレル著／金田廉訳『芸術論』
小笠原長生『東郷元帥』（少年大日本史第48巻）
関根順三『乃木大将』（少年大日本史第49巻）

シェストフ著／河上徹太郎・阿部六郎訳 中原中也宛献呈署名入り『悲劇の哲学』

昭和9年1月28日／芝書店

『悲劇の哲学』署名部分

平成22年11月、中原中也宛献呈署名入り『悲劇の哲学』の寄贈を受けました。署名には「訳者」としかなく、河上も阿部も中也の友人ですが、調査の結果、阿部の筆跡と判断いたしました。

中也の蔵書は、中也の死後、形見分けのようなかたちで友人たちの手に渡り、さらに、中也の生家が火災に遭ったため、現在ほとんど残っていません。今回ご寄贈いただいた本は、その意味で大変貴重な1冊です。

著者・シェストフは、1866年生まれのロシアの哲学者です。彼は理想主義を否定し、虚無的な世界観を中心に論を展開しました。『悲劇の哲学』が出版された昭和9年頃、日本では、マルクス主義による革命を目指した人々が厳しい弾圧を受けました。また、昭和6年に起きた満州事変など社会情勢の急変もあいまって、理性によって世界を認識しようとする合理主義的思考そのものに疑いを抱くような雰囲気が社会全体にただよい、人々は言い知れぬ不安を感じました。そのような中で出版された『悲劇の哲学』は、発行直後から大きな反響を呼び、「不安の文学」と呼ばれるブームを生み出す要因となりました。

中也の昭和9年の日記には「文壇に与ふる心願の書―『不安の文学』をめぐりて」と題した文章がありますが、そこで中也は、シェストフについて、「不安の文学」の流行とともに批判的に論じています。

阿部六郎
(1904―1957)
ドイツ文学者・文芸評論家。中也とは昭和3年に出会う。昭和4年、中也と河上が中心となって創刊した雑誌「白痴群」の同人となり、第3・4号に小説「放たれたバラバ」を連載した。中也が昭和12年に死去した際「文学界」に追悼文「中原のこと」を発表。その後も「中原中也断片」「死の近接について―告白と糾明―」など、たびたび中也を回想する文章を書いている。また、昭和24年9月の「文芸」に発表した「詩の道程―中原中也論」は、本格的な中也論である。

河上徹太郎「秋立つ日」草稿 5枚

立秋を過ぎると、暑さはまだまだだが、さすが日ざしが傾いて来る。日の光が何となく黄味を帯び、空気が硬くなる。裏山の秋の七草も、尾花を除いて、大体出揃つた。桔梗と撫子はもうとつくから咲いてゐるが、近年採り手がふえて仲々見つからない。女郎花が雑草の間に黄色の花をチラつかせ出したのは、こゝ二三日だ。七草の中に葛を数へるのは、いゝ著想である。路の上に藤色の花弁が散り敷いてゐるので、上を見ると、大きな葉隠れに葡萄酒色の花の房が、垂れた蔓の節々から直立してゐる。古代支那、先王の良き時代に、宮廷附家庭教師の才媛達が自分で織つた葛の着物をよく洗濯して着、暑中休暇だかに父母の許へ帰省する詩が詩経にあるが、夏の山路で思ひ出すにふさはしい風物である。

徹太郎専用の「河上用箋」に、鉛筆で書かれています。秋めく景物の観察記録から始まるこの文章は、雑誌「文藝春秋」昭和39年10月特別号の巻頭随筆として掲載されました。

昭和20年、戦災で東京都品川区五反田の家を焼け出された徹太郎は、神奈川県川崎市柿生に転居し、その地を終の棲家と定めます。友人たちから「いつまでそんな田舎に引っ込んでいるつもりだ」と揶揄されるほどのどかな土地だったようで、徹太郎はしばしば趣味である狩猟や山歩きを楽しみました。また、幼い頃から郊外生活に馴染みがあるという徹太郎の回想には、府立一中時代、畦道を通って河上家に遊びにやってきたという小林秀雄も登場し、風景とともに徹太郎の大切な思い出のひとつとして語られます。

そんな田舎暮らしの中で描き出された冒頭のくだりですが、この後話題は、高度成長期の最中、急激に進められている土地開発へと移っていきます。田圃の真ん中に建設された工場の騒音に、執筆を妨げられる日々をユーモラスに描きながら、徹太郎は〈わが国土到る所青山である。そしてそれを一度ひつくり返したら、もう後へ戻らないのである。〉と主張し、文明批評家としての一面を覗かせています。

1 コンサート「声のまぼろし」

11月3日、山口県教育会館ホールで、山口開府650年・湯田温泉復活300年記念事業として、詩と音楽のコンサート「声のまぼろし―中原中也、金子みすゞ、まど・みちおの彼方へ」を開催しました。出演は、VOICE SPACE、谷川俊太郎氏、佐々木幹郎氏の皆さんでした。

VOICE SPACEは、ギター・バイオリン・ピアノなどポピュラーな楽器の他、琴・鼓やアイリッシュ・フルートなど和楽器・民俗楽器、さらにヴォーカルも加わったオリジナリティあふれる素敵な演奏を繰り広げました。

また、演奏の合間には、谷川俊太郎氏と佐々木幹郎氏が、中原中也、金子みすゞ、まど・みちおや自分自身の詩などについて、軽妙なトークを展開しました。

特筆すべきことは、金子みすゞの詩に曲をつけた組曲「わたしと小鳥と鈴と」がこのコンサートのために新たに制作され、初演されたことと、先にVOICE SPACEが曲を作り、谷川俊太郎氏が書き下ろしの詩をつけた「どんぶらこっこ」がご本人の朗読により初演されたことです。

最終曲の「子守歌よ」では、サビエル記念聖堂少年少女合唱団「ステラ」が合唱に加わり、非常に迫力ある演奏になりました。

VOICE SPACEのメンバーが客席に降り、観客と一体になってパフォーマンスを繰り広げる場面もあって、とても楽しいコンサートになり、多くの来場者に詩と音楽の魅力を体感していただけたようです。

2 詩の朗読会 ～心も声も響かせよう

11月21日、山口市内の米屋町商店街みずほ銀行前広場で、山口市との共催による、山口市中心市街地まちと文化推進事業「詩の朗読会～心も声も響かせよう」を開催しました。今年で3回目のこの事業は、昨年よりも出演者が増え、約40名の方々が朗読してくださいました。

出演は、山口市立湯田小学校、山口市立白石小学校、山口市立大殿中学校、山口大学教育学部附属山口中学校、山口県立山口中央高校、NHK文化センター山口教室「楽しい朗読」受講生、演劇集団「交差転プロジェクト」の皆さんと、中原中也賞受賞詩人の長谷部奈美江氏、三角みづ紀氏。歌手のよしもとあい氏を司会に招き、福田百合子名誉館長も登場しました。

中也の詩だけでなく、自作の詩を読まれる方も多く、歌や動き、効果音を交えたものもあって、充実した朗読会となりました。

最後は、引率の先生方とゲスト出演者で、中也の詩「帰郷」を朗読。約1時間半にも及ぶ朗読会は、「あ、おまへはなにをして来たのだと……／吹き来る風が私に云ふ」の一節が余韻となって終了しました。

商店街は、買い物客が往来しますが、突然響いてきた詩の朗読の声に、戸惑いながらも耳を傾ける人、目を見張る人が何人もいらっしゃいました。中也が好んだ詩の朗読が、いつか往来の人々の口からも漏れてくるようになると楽しいかもしれません。

3 湯田温泉 X'mas 湯らぎ狐(コン)サート 2010

12月23日、「湯田温泉X'mas湯らぎ狐サート 2010」が開催され、観光案内所とともに記念館前庭が会場になりました。

このイベントは、例年12月に山口市内で開催される「日本のクリスマスは山口から」の一環として湯田地区商工振興会の主催で行われたもので、平成21年に続き2回目になります。

前庭には、水に浮かべるフローティングキャンドルが運び込まれ、湯田の各所から集結したスノーマンのイルミネーションとともに夜の記念館を美しく彩りました。ひそかに注目されたのがオリジナルデザインのクリスマスツリーです。和紙を使ったやわらかい光が静かに個性を主張していました。

コンサートは、アカペラコーラス、ゴスペル、ギター弾き語り、ハンドベル、ピアノソロなど、地元のアマチュアミュージシャンの競演となりました。オープニングセレモニーでは、記念館職員も中也詩の朗読で参加。名誉館長の「含羞」(ピアノ伴奏付)、館長の「幻影」(ブズーキ弾き語り)、主催者や進行役のアナウンサーを交えた「サーカス」で会場を盛り上げました。

当日は、開館時間を延長して入館無料とし、三〇〇名を超える方に展示をご覧いただきました。

主なできごと（平成22年度 記念館行事記録）　2010年4月－2011年3月

4月21日　**企画展Ⅰ「第15回 中原中也賞」**（～7月19日）

23日　**第71回 中也を読む会**
企画展Ⅰ「第15回 中原中也賞」見学
―文月悠光の詩を読む

29日　**生誕祭「空の下の朗読会」**（於 記念館前庭）
自由参加の朗読（朗読参加者24名）
DiVa（ディーバ／高瀬麻里子、谷川賢作、大坪寛彦）コンサート

第15回 中原中也賞贈呈式（於 ホテル松政）
受賞詩集：文月悠光
『適切な世界の適切ならざる私』（思潮社）
記念講演「中原中也・心に棲む詩句」　講師：澤地久枝
主催：山口市

30日　**第1回 運営協議会**

5月11日　**特別展示：新収蔵資料公開**（～16日）
中也直筆葉書（山岸光吉宛）

21日　**第72回 中也を読む会**
CD「声のまぼろし」収録曲を聴く
―「サーカス」「湖上」「朝の歌」「坊や」「子守唄よ」

27日　**秋篠宮殿下視察**

6月25日　**第73回 中也を読む会**
屋外展示「色の詩」を読む1
―「春の夜」（『山羊の歌』）「雨の日」「青い瞳」（『在りし日の歌』）

7月23日　**特別企画展「河上徹太郎と中原中也―その詩と真実」**（～10月3日）
オープニングセレモニー開催

第74回 中也を読む会
特別企画展「河上徹太郎と中原中也―その詩と真実」見学

8月14日　**プロムナード・トーク①　特別企画展解説**

27日　**第75回 中也を読む会**
中也の短歌を読む

31日　**機関誌「中原中也研究」第15号発行**

9月18日　**公開講演Ⅰ**（於 ホテルニュータナカ）
「編集者の見た河上徹太郎」　講師：坂本忠雄
共催：中原中也の会

22日　**河上徹太郎命日企画**
特別企画展パンフレット購入者先着10名に粗品贈呈

24日　**第76回 中也を読む会**
谷川俊太郎の詩を読む

10月2日　**プロムナード・トーク②　特別企画展解説**

6日　**企画展Ⅱ「中也の住んだ町―中野・高円寺」**（～H23年1月23日）

10月22日　**中也命日、お墓参り**

第77回 中也を読む会
中也の詩を読む
命日企画―「羊の歌」

11月3日　**詩と音楽のコンサート**
「声のまぼろし―中原中也、金子みすゞ、まど・みちおの彼方へ」
（於 山口県教育会館ホール）
出演：VOICE SPACE、谷川俊太郎、佐々木幹郎
特別出演：サビエル記念聖堂少年少女合唱団「ステラ」

21日　**詩の朗読会―心も声も響かせよう**
（於　山口市米屋町商店街 みずほ銀行前広場）
共催：山口市

25日　**第2回 運営協議会**

26日　**第78回 中也を読む会**
企画展Ⅱ「中也の住んだ町―中野・高円寺」見学

12月23日　**湯田温泉 X'mas 湯らぎ狐（コン）サート**（於 記念館前庭）
主催：湯田地区商工振興会

24日　**入館者55万人**
第79回 中也を読む会
中也の詩を読む
―「冬の雨の夜」（『山羊の歌』）「冬の夜」（『在りし日の歌』）

1月8日　**特別展示：寄託本『山羊の歌』公開**（～10日）
中也自筆署名入り献呈本（河上徹太郎宛）

26日　**企画展Ⅲ「中也が読んだ本」**（～4月17日）

28日　**第80回 中也を読む会**
企画展Ⅲ「中也が読んだ本」見学

2月11日　**愛、あったまる　山口お宝展**（～4月3日）
中也書簡、中原政熊書簡の特別展示
主催：山口商工会議所

16日　**第8回常設テーマ展示**
「これが私の故里だ」（～H24年2月12日）

18日　**開館17周年記念日**

25日　**第81回 中也を読む会**
常設テーマ展示「これが私の故里だ」見学

3月21日　**公開講演Ⅱ**（於 ホテルニュータナカ）
「中也とその仲間たち」　講師：村上護

25日　**第82回 中也を読む会**
屋外展示「色の詩」を読む2
―「夕照」（『山羊の歌』）「含羞」「曇天」（『在りし日の歌』）

31日　**館報第16号発行**

中原中也の会

6月26日　**中原中也の会第14回研究集会**　（於 日本近代文学館）
総合司会：阿毛久芳
研究発表「〈歌う〉と〈語る〉をめぐる思考
―中原中也と富永太郎」
発表者：吉田恵理
研究発表「戯詩「タバコとマントの恋」の
一解釈とその仏訳の過程」
発表者：河村初穂
司会：加藤邦彦
テーマ「坂口安吾と中原中也」
講演「安吾と中也の「ファルス」について」
講師：川村湊
シンポジウム「アウトサイダーの〈道化／ファルス〉
―中原中也と坂口安吾―」
パネリスト：権田浩美、疋田雅昭
司会：中原豊

7月31日　**会報第28号発行**

9月18日　**中原中也の会第15回大会**　（於 ホテルニュータナカ）
総合司会：中原豊
テーマ「河上徹太郎と中原中也」
講演「編集者の見た河上徹太郎」　講師：坂本忠雄
特別講演：創作能「中也」　出演：中所宜夫、鈴木啓吾
公開対談「日本のアウトサイダーと中原中也」
講師：佐藤泉、富岡幸一郎
司会：阿毛久芳

19日　**中原中也の会第11回セミナー**
（於　ホテルニュータナカ・中原中也記念館）
講演「岩国・河上家調査報告」　講師：薮田由梨
特別企画展「河上徹太郎と中原中也―その詩と真実」見学
解説：薮田由梨

10月25日　**会員名簿発行**

12月25日　**会報第29号発行**

『生首』

辺見庸（へんみよう）氏

第16回中原中也賞は、202冊の応募・推薦詩集の中から、辺見庸氏の詩集『生首』が選ばれました。辺見氏は既に芥川賞（平成3年）や講談社ノンフィクション賞（平成6年）などを受賞している現役作家です。受賞当時66歳で歴代受賞詩人の中で最高齢となりました。最終選考に残った7冊の詩集の作者は、20代後半1名、30代2名、50代3名、60代1名と、今までの中也賞最終候補詩集の内でも高い年齢層での選考となりました。選考会の場で論点となったのは、中也賞の位置付けでした。中也賞には新人賞的な意味がありますが、辺見氏はすでに文学の別ジャンルで確固たる地位を確立しています。しかし、辺見氏にとって初めての詩集であり、今後も書き続けていく力のある詩人であるという理由で、年齢は関係なく中也賞にふさわしいとの結論が出ました。

〈最後に辺見の詩集が、選考委員の支持を集めたのは、わたしたちが生きている世界のいまとここに、全存在をかけていることばの強度が並はずれていることだった。彼の詩には現代社会の腐敗し、機能不全に陥っている内臓が、鷲掴みにされている臨場感がある。これまで作家、ジャーナリスト、エッセイストとして実績のある人が、詩の世界に新人として飛び込んでこられた。その意味を、わたしたちは重く受けとめたい〉（選評より）

懺悔するな。
祈るな。
もう影を舐めるな。
影をかたづけよ。
自分の影をたたみ、
売れのこった影は、海苔のように
食んで消せ。
生きてきた痕跡を消せ。
殺してきた証拠を焼却せよ。
しずやかに、無心に、滑らかに、
それらをなすこと。
いまさらけっして詫びるな。
告解を求めるな。
じきに終わることを、ただ
てみじかに言祝げ。
消失を泣くな。
悼むな。
賛美歌をうたうな。
すべての声を消せ。
最期の夕焼けを黙って一瞥せよ。
折りもおり、五分前に誕生した赤子を
心から祝福せよ。
もしもまだ時間があったら、
もっとも罪に縁遠い顔をした
あの幸せな老詩人を
ぶち殺しに行け。

（「世界消滅五分前」より）

Chuya Nakahara prize

Yo HEMMI

力強い言葉を放つ新生詩人。散文の世界で確固たるものを築きあげた作家が、敢えて、詩という表現形式であらわそうとしているもの。その詩の世界は、重厚な言葉で構築されています。

◎平成23年度 記念館関連行事予定　2011年4月 ― 2012年3月

4月20日	企画展Ⅰ「宮嶋康彦 ―中原中也に訣別 白と黒の振幅の果てに」（～8月28日）
4月29日	生誕祭　空の下の朗読会（於　中原中也記念館前庭）〈無料開館日〉
5月5日	こどもの日〈無料開館日〉
5月21日	中原中也の会第15回研究集会（於　KKRホテル金沢）
9月1日	特別企画展「雑誌『四季』と中原中也―孤高な嘆き」（～11月6日）
9月17日	中原中也の会第16回大会（於　ホテルニュータナカ）
9月18日	中原中也の会第12回セミナー（於　ホテルニュータナカ・中原中也記念館）
10月22日	中也命日・お墓参り
11月9日	企画展Ⅱ「中也の母・フク」（～平成24年4月15日）
平成24〈2012〉年2月15日	第9回常設テーマ展示「『在りし日の歌』まで」（仮）

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第16号】 平成23年3月31日
発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL 083-932-6430 FAX 083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/
環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。